人間文化創成科学論叢　第11巻　2008年

「ジャパゆきさん」をめぐる言説の多様性と差異化に関する考察

～雑誌記事の言説分析をもとに～

大　野　聖　良*

The Consideration about the Diversity and Differentiation of Discourses around "Japayuki-san": Through Discourse Analysis in Magazines

ONO　Sera

abstract

In this paper, I focus on "Japayuki-san", migrant female workers who were located in the entertainment industry of Japan. "Japayuki-san" was widely used in the mass media in the 1980s, however we avoid using this term and have not mentioned its meaning, because it has been regarded as a disparaging term in the public since the 1990s. I consider discourses around "Japayuki-san" in articles of magazines for men and women, and about economy, labor problems and national security from 1985 to 1995. Through this approach, I find that "Japayuki-san" has various images and different meanings in each kind of magazine, because readers who receive information from magazines need their own convenient discourses around "Japayuki-san" in order to maintain and intensify their political, social, and cultural positions in the society. Moreover, I analyze how these images and meanings are involved with the process that we recognize "Japayuki-san" as a disparaging term. This view shows that migrant female workers, who were called "Japayuki-san", are others like mirror images which reflect how Japanese society gazes at them.

Keywords : "Japayuki-san", disparaging term, migrant female worker in Japan, discourse, others

1．はじめに

(1)　本稿の目的

1980年代初頭、フィリピン、タイ、韓国、台湾などのアジア諸国から多くの女性が来日し、彼女たちが主に性風俗産業に従事していることが可視化され、メディアではこのアジア女性の流入を「ジャパゆきさん」現象として取り上げた。1980年代前半から、日本の性風俗産業に従事するフィリピン人・タイ人女性を取材したジャーナリストが彼女らを「ジャパゆきさん」と表現したことを契機に、それは活字・視覚メディアを通じて広がった[1]。しかし、1990年代に市民団体から名称が差別的だとして批判されるなど[2]、その呼び名は蔑称とされ、現在では使用頻度も少ない。「ジャパゆきさん」という呼び名は、女性学事典では「主にアジア諸国から日本に出稼ぎにくる女性。その大半が性産業に従事せざるを得ない状態であったため、明治時代、売春を生業とした日本女性"からゆきさん"にちなんで名づけられた。」「"貧しい国から""お金を稼ぎに""売春"をしに来た女性というイメージで語られ、」「蔑称として使用される場合が多い」と紹介されている（長谷川 2002、pp. 186-187）[3]。鈴木によ

キーワード：「ジャパゆきさん」、蔑称、滞日出稼ぎ外国人女性、言説、他者

＊平成18年度生　ジェンダー学際研究専攻

れば、フィリピン国内では「ジャパゆきさん」は必ずしも蔑称としての意味ではない使われ方もあり、元・現役エンターティナーの中には、「ジャパゆきさん」という経験を再評価し、そこからプライドをみせることもあったという。また「ジャパゆきさん」という用語は解釈する側の政治的主観から解放されることはないと指摘する（鈴木 1998、p. 108）[4]。社会的優位にたち、彼女らと経験を共有していない者による解釈には歪みが生じる。また、「ジャパゆきさん」という呼び名の使用をただタブー視し沈黙することは、当事者の持つ複雑な意味合いを切り捨てるだけでなく、その呼び名を創出、付与した側の権力構造を隠蔽することに繋がる。90年代に蔑称とされた「ジャパゆきさん」をめぐる言説を再考する必要があるのではないか。

80年代に「ジャパゆきさん」と名指された滞日出稼ぎ外国人女性についての議論は、伊藤やMackie、笠間などによって展開された。伊藤は、アジア女性の日本への流入が「外国人労働者問題」ではなく、「ジャパゆきさん」現象という女性特有の問題とされた背景として、女性の移動の固有性が見過ごされた点、彼女たちの多くが従事する性風俗産業での性愛の商品化が性の二重規範により正当な労働とみられない点を挙げ、女性の移動を政治経済構造アプローチから考察する必要性を説いた（伊藤 1992、pp. 293-297、pp. 325-326）[5]。笠間は伊藤の指摘を受け、滞日アジア人女性について、政治経済構造とその支配関係に関わる「文化」領域における権力分析も必要だとし、久田による『フィリッピーナを愛した男たち』[6]を取り上げる。そして、日本における「フィリッピーナ」＝「ジャパゆきさん」表象の質的転換を指摘した。彼女たちを「犠牲者」としてではなく、「したたかなアジア女性」とみなすことで、その表象は構造的問題を個人の自由意志に矮小化するとともに、構造的な力関係の格差を隠蔽し、現状を肯定する象徴権力の暴力であったと批判する（笠間 2002、pp. 124-134）[7]。また、久田のテクストにおける日本人女性の「まなざし」は、欧米から「オリエント」（劣性）化されている自己を忘却するための装置でもあるとする（笠間 同上、pp. 142-143）。笠間と同様に、Mackieも久田など日本人女性によるフィリピン人エンターティナーのテクスト分析から、「ジャパゆきさん」というラベルによって出稼ぎ外国人女性が性化・幼児化され、「身体」として構築されることで、彼女たちは他者化される一方、観察者は成人、理性的な存在として構築されていると指摘する。そして観察者が女性であっても、観察者のエスニシティや階級によってジェンダーが無視され、権力をもつ存在として構築されると指摘する（Mackie 1998, p. 61）[8]。このような議論から、「ジャパゆきさん」をめぐる言説の考察は、「ジャパゆきさん」という呼び名を生成、使用する側の姿を浮かびあがらせることだと分かる。名づけは名指す側にとって意味があるからこそ行われる。「ジャパゆきさん」をめぐり展開された言説はメディアを通じて流布されたが、それを考察することは、私たちが彼女たちに投げかけたまなざしの有り様を知る手がかりとなるだろう。Hall によれば、メディアは「出来事」に社会的意味を付与して価値ある「ニュース」として生産する際、読者が共有する「利害・価値・関心」によって体系づけられた「意味の地図 map of meaning」に基づいて、その「出来事」を理解可能なものにするという（Hall 1978, pp. 54-55）[9]。このような解釈にたてば、メディア分析によって、どのような「ジャパゆきさん」像が社会へ投げかけられたか、それがいかなる「利害・価値・関心」に基づくのかを分析し、彼女らをめぐる言説の社会的意味を考察することができる。このような問題関心から、本稿は80年代後半から90年代のメディアにおける「ジャパゆきさん」に関する言説を抽出し、それがどのように語られたのか、そしてどのように意味づけられたのかを考察する。

ここで留意すべきことは、「ジャパゆきさん」のような名づけは決して（日本人ではない）有色アジア人女性特有の問題ではない点である。女性があるコミュニティから移動する際には絶えずレッテルが貼られ、他者化されてきた。そこには男性が女性の再生産資源を支配・管理する家父長制が作用している（上野 1990、pp. 57-58、ハム 1999、pp. 230-232）[10]。明治時代、出稼ぎで海を渡った日本人女性を「からゆきさん」と呼ぶように、家父長制の領域外へ出る女性に対する牽制・非難は普遍的に行われてきた。本稿で扱う「ジャパゆきさん」もその大きな枠組みの中で80年代から90年代に再生産された現象だと考えるべきである。

⑵ 分析資料および分析方法

本稿では、国立国会図書館に所蔵される週刊、月刊、季刊誌に掲載された「ジャパゆきさん」に関連する記事を分析資料とする。メディアには大まかに活字メディアと視覚メディアがあるが、本稿では活字メディアの中で雑誌記事を取り上げる。雑誌は社会意識やイデオロギーの分析に適し、セグメント化された雑誌の読者ターゲットは、情報のニーズのみならず性別や年齢、意識、ライフスタイルから収入にいたるまで明確であるため、読者

の欲望が誌面に反映されやすい（諸橋 1993、pp. 16-17）[11]。したがって、呼び名を生成・使用する側の存在を視野に入れて考察する場合、雑誌記事がより適した資料であると考える。

記事の選別にあたっては、大宅荘一文庫雑誌目録の「ジャパゆきさん・外国人娼婦」[12]という分類から334件（計59冊）を取り上げた。この分類では1963年からある程度連続して記事が掲載され、86年の47件をピークに85年から93年まで平均33件、94年以降は平均10件へと減少する。さらに「ジャパゆきさん」という言葉自体は1981年に初めて雑誌の見出しに登場し、86年の34件をピークに85年から88年の間に平均25件、89年から95年まで平均５件、それ以降はほとんど見出しに登場しない。このような傾向から、分析資料を85年から95年とした。しかし、この抽出方法は期間も女性たちに関するテーマも限定的であり、滞日外国人女性に関する言説の一部にすぎない。研究方法としては言説分析[13]を用いて、雑誌自体の販売形態、雑誌の購読対象者層、各々の雑誌の特徴を『雑誌・新聞総かたろぐ』[14]で分類したうえで、各々の記事を主題別に分類し、「ジャパゆきさん」をめぐる言説を考察する。むろん、資料の選択や言説の解釈の際に生じる分析者のバイアスに自覚的でなければならない。

２.「ジャパゆきさん」関連記事を掲載する雑誌の傾向

雑誌は発行者によってあらかじめ中心的読者層が想定されており、したがって記事内容はそれによって規定されることになる。

まず、「ジャパゆきさん」関連記事が多く掲載される雑誌は男性誌である。このような男性誌は『雑誌新聞かたろぐ』の分類によれば、中心的読者層に男性が占める割合が高い雑誌25冊、また読者層割合は記載されていないが、同資料が掲載する各雑誌の特徴欄から男性を対象読者として想定できる雑誌８冊を含め、合計33冊であった。このうち中心的読者層を20代から30代のサラリーマンとする雑誌が特に多い。また、「ジャパゆきさん」関連記事数と雑誌の刊行形態との関係では、週刊誌が記事数の上で圧倒的に多い。週刊誌は情報の迅速な提供が求められる雑誌であり、記事を吟味しなければならない月刊誌よりも、緊急性・集約性・特異性等がそろえば週刊誌の方が掲載されやすい（川井 1997、p. 105）[15]。さらに10件以上の記事を掲載する週刊誌の質的傾向をみると、「娯楽」、「エンターティメント」と銘打つ雑誌が多く、記事内容は政治経済から生活、芸能など様々なジャンルにわたるが、「告発」「人の本音」「好奇心」などスキャンダルな要素を加味する点が特徴的である。したがって、そのような記事では読者の感情を一時的に刺激する一過性の事象としてとりあげられる場合が多いと考えられる。

しかしながら、掲載雑誌は男性誌だけではなく、総合誌と呼ばれる「ビジネス・エリート」など会社の管理職を対象にした『エコノミスト』『週刊東洋経済』『経済往来』などの経済・経営専門誌や、『新地平』のような労働問題を扱う雑誌、女性雑誌にも「ジャパゆきさん」関連記事がみられる。次章では掲載記事をもとに雑誌の特徴を考慮しつつ、「ジャパゆきさん」がどのように描かれているのかを考察する。

３.「ジャパゆきさん」と呼ばれた滞日外国人女性

本章では掲載記事から「ジャパゆきさん」と呼ばれる滞日外国人女性をめぐる言説がどのように描かれているのかを考察する。多くの記事が「ジャパゆきさん」という用語を見出しや本文中に使用しながらも、「いわゆる『ジャパゆきさん』」という具合に、その意味が読み手と書き手の間で暗黙のうちに共有される仕組みとなっており、その用語は記事の内容を一言で説明する表現として使われている。本章では、「ジャパゆきさん」が頻繁に使用される掲載記事を取り上げ、各々の文脈から「ジャパゆきさん」には何が想定されているのかを考察する。

⑴ 「ジャパゆきさん」のもつ共通項～出稼ぎ外国人女性～

まず、「ジャパゆきさん」を取り上げた記事の多くは、フィリピン、タイ出身の女性に関するものであるが、「ソウルから来たジャパゆきさんをかくまって」（婦人公論 1985年４月 pp. 334-341）や「ジャパゆきさん（台湾人：筆者）“ナゾの連続自殺”」（週刊大衆 1988年９月12日 pp. 56-57）など、韓国人女性や台湾人女性も「ジャパゆきさん」として描かれ、特定の国籍は想定されていない。また、「ジャパゆきさん」の滞日状況の特徴とし

て、観光ビザでの来日、主にスナックでの不法就労や資格外労働という点が挙げられる一方、フィリピン人女性に多い「ダンサー、シンガーなどのエンターティナーで来日するが、実態はホステス・売春」(噂の真相 1987年3月 pp. 48-54) という興行ビザでの来日も同様に語られる。このように「ジャパゆきさん」と呼ばれる女性はある特定の国籍をもつわけではなく、また特定の滞日形態をとっているわけでもない。「身ひとつで出稼ぎにくる」(創 1987年3月 pp. 140-154) など、出稼ぎ外国人女性という要素が様々な「ジャパゆきさん」像の共通項である。したがって、「ジャパゆきさん」がフィリピン人エンターティナーのみの表現ではないことが指摘できる。

⑵ 「ジャパゆきさん」に付与される複数のイメージ

「ジャパゆきさん」の根本的要素は出稼ぎ外国人女性であったが、そのカテゴリーには様々なイメージが見出せる。本節では、雑誌の特性を考慮しながら、年齢・性別等でセグメント化された読み手に投げかけられている各々のまなざしを考察する。その場合、ジェンダーなど記事の書き手の立ち位置がどのようにこの言説の生成に関わるかをみる必要があろう。しかし、本稿の対象とする分析資料には署名記事が極めて少ないため、書き手に注目した分析は難しい。したがって各々の雑誌の特徴を考慮した分析に限定せざるを得ない。

① 男性誌における「ジャパゆきさん」～健気、したたか、悪女、害悪～

前述のとおり、本稿で扱う雑誌には20代、30代男性のサラリーマンを中心的読者層とするものが多い。男性誌では、健気、したたか、悪女、害悪という4つのタイプの「ジャパゆきさん」をめぐる言説がみられる。

まず、第一のイメージとして「健気」な女性像が表れる。そこでは親孝行のため、子どものためという利他的要因、そして「店をもちたい」「土地を買いたい」という自己目標のためという来日理由が誌面で強調される。そして、違法性が薄い女性にかぎり、怠けることなく一生懸命働き、給料の大半を家族へ仕送りするために節約を心掛ける健気なイメージが付与されている。

> (興行ビザで入国したフィリピン人女性について-筆者) クラブママ「すこしぐらいカゼをひいたって、ガンバル、ガンバルといって、休まないでよく働く。堅いしね。お客さんとは絶対デートしないもの…。」(週刊朝日 1985年8月16日 pp. 104-108)

特にフィリピン人女性の場合は本国の貧困と政治的不安定が引き合いにだされて、「昔の『日本人らしさ』」が見出される (阿部 2005、pp. 965-966)[16]。しかし、それ以上に「古きよき時代の日本女性」像が彼女らに強く投影されており、その延長線上にはそうではなくなってしまったといわれる日本人女性に対する批判がこめられている。その例として、中高年男性を主な読者層とする『新潮45』では、ホームヘルパーとして正規に来日したフィリピン女性 (じゃぱゆき女中と本文中に記載) が、外資系企業に勤める若い日本人キャリアウーマンのもとで働く様子が描かれている (新潮45 1991年6月 pp. 66-74)。そこには、「だらしない、ヒステリー、尻軽」な日本人女性と、「生活力に長けた、我慢強い、身持ちが堅い」フィリピン人女性との対比という構図があり、貧しい国からやってきた「伝統的」な女性が性別役割分業を放棄する「先進的」日本人女性を戒める象徴として登場する。

それではセクシュアリティが強調される場に位置づけられた女性はどうだろうか。スナックで働き、時には「店外デート」など男性客に対して売春したり、それをほのめかす女性が誌面に登場することが多い。しかし、不法就労や資格外活動としてのホステスや売春の違法性はここではほとんど注目されない。むしろ、彼女たちは日本人男性の男性性を補強するツールとして描かれる。

> (キャバクラのフィリピン人ダンサー談－筆者) …ここへいくお客さん、スケベーだけど頭いいね…でも、わたしエッチな人嫌い。顔とかスタイルよりハートが優しい人好きネ。(FRIDAY 1985年6月28日 pp. 34-35)
>
> (台湾人ホテトルA、フィリピン人ダンサーB、ホステスC、タイ人デートクラブ嬢Dが日本人男性について語る－筆者) B:日本人男性は優しいし、思いやりもあるね、でも…C:セックスはだめ (笑) …B:でも、日本人はよく働くし、真面目ネ。ハズバンドにするには最高。A:日本が金持ちになったのもよくわかるわ。…D:日本人は正直なのね…司会 (取材記者):あんまりいじめるなよ、日本がここまできたのも、正直と

努力があったからこそ…（週刊宝石 1985年７月19日 pp. 188-191）

男性性に対する劣等感を否定するのではなく、「優しさ」「真面目」「正直」という内面性の美徳が「ジパング」の経済力をつくりあげたと強調することで、日本人男性の男性性を補強し再評価する。しかし、「ジャパゆきさん」は日本人男性にとって無害または好ましいものだけではなく、別のイメージも浮かび上がる。それは出稼ぎの目的達成のためには手段を選ばない「たくましく、したたかな女性」像である。たとえば、地方のパブでは儲からないからと、来日３日後に岡山の店からタクシーで東京へと脱走したダンサー（週刊文春 1987年１月１日/８日合併号 p. 36）や年末の里帰りのために、お土産など大荷物を抱えて不法就労として入管に殺到する「ジャパゆきさん」（週刊新潮 1985年１月３日 p. 146）、また入管に摘発され強制送還されても偽造パスポートで再入国する「違法ジャパゆきさん」（PLAYBOY 1988年４月 p. 15）など、公的機関や制度までも利用して貪欲に稼ごうとする女性たちが描かれている。ここでは「健気」コード内での「節約するしっかり者」という解釈が、日本人男性にとって男性性のプロテクターである経済力を奪う者へと転換されている。さらに「ジャパゆきさん」が経済力のみならず、男性性をもコントロールしようとする場合には「悪女」像が付与され、特に純粋で真面目とされる日本人男性を狂わせ、犯罪へとしむける者として描かれる。たとえば、20才の「ジャパゆきさん」にのめりこんで強盗を犯した妻子持ちの警部補（TOUCH 1988年６月14日 pp. 10-11）や、「ジャパゆきさん」である愛人とタイ人女性を売春クラブに斡旋した妻子あるキリスト教系高校教師や寺の住職など、社会的地位のある日本人男性が犯罪に手を染めた事例がみられる。そこでも「もっとも人柄がよく、信用できる人だった。…警察組織という無菌状態の中で純粋培養された男のモロさが今回の原因」（TOUCH 同上）というように、「ジャパゆきさん」が「無垢な」男性につけこむという言説がみられる。

しかし、それは男性が「悪女」に近づかなければ済むことであり、一定の距離をおけばよい他者であるにすぎない。「ジャパゆきさん」がより周縁化された像として登場するのが「害悪」として排除の対象となる場合である。その代表的事象が「エイズ」[17]感染した「ジャパゆきさん」である。1986年長野県松本のスナックで働くフィリピン人「ジャパゆきさん」が「エイズ」に感染していたという記事が『サンデー毎日』を中心に掲載され、「エイズのジャパゆきさん２人いた！『赤羽・蒲田・松山でも“仕事”!』」（サンデー毎日 1986年12月７日 pp. 20-29）「エイズのジャパゆきさんヌード特写と全告白　私の心と体、お見せします！」（Emma 1986年12月17日 pp. 3-10）など、「エイズ」に感染した女性の発見から帰国までの経緯、帰国後の様子が詳細に記されると同時に、女性が売春していたことが判明し、感染に怯える男性らのパニック状態が描かれている。

「エイズじゃぱゆきさん『売春白状』にオトーさんたちの顔が引きつった…現代の恐怖病エイズが長野県松本市に撒き散らされていた！身に覚えのオトーさんたちは真っ青、信濃路はときならぬパニックの真っ最中」（週刊アサヒ芸能 1986年11月20日 pp. 30-33）

さらに、当人は入院しているわけでもなく、「すでにＡというプロモーターと接触しているの。再来月行くことになると思うわ。できればまた松本に行きたいわね」（Emma 同上）という、「エイズ」に対して無知であっけらかんとしている女性に対し、「第二、第三の〇〇（女性の名前）を通して、AIDSは日本に持ち込まれ続けるだろう」（Emma 同上）と書いている。その後の甲府市や横浜市でのタイ人「ジャパゆきさん」の「エイズ」感染の際も、「エイズ」は「ジャパゆきさん」を通して外から持ち込まれるというシナリオが描かれており、「ジャパゆきさん」関連記事には「エイズ」への言及が付いてまわるようになった。そして、「ジャパゆきさん」とのセックスを「妻子を犠牲にするロシアン・ルーレット」と表現し、「ジャパゆきさん」は男性の家族や命をも奪う「害悪」となり、排除と監視の対象とされてしまったのである。「エイズ」を「ジャパゆきさん」に接合させ、彼女らを危険な集団として捉えることで、「エイズ」は「普通に生活する健康な日本人男性」の問題でないとする一方、彼らは己の欲望と感染の恐怖とのせめぎあいの中で「ジャパゆきさん」を好奇なまなざしで覗き見ているのである。

以上のように、男性誌では、「ジャパゆきさん」は変わりゆく日本人女性と日本人男性の関係性を暗示する存在として描かれる。1970年代以降の女性運動と女性の地位の相対的な向上により、日本人女性は家父長制下の

「伝統的」な妻という囲いに収まるものではなくなった。その中で「じゃぱゆきさん」は20代、30代の中流階級男性に対して日本人女性のかわりに男性性を肯定する存在、しかし深入り禁物という境界線が引かれた一過性の「男性性増進剤」として意味づけられる。　その一方、団塊の世代の男性にとっては、いかに日本人女性が堕落しているかを語るための「伝統的女性」指標として意味づけられる。さらに、男性誌では「ジャパゆきさん」には滞日出稼ぎ外国人女性と日本人男性との間の距離に応じたイメージも付与されている。彼女らが日本人男性の既得権益を侵さないまったき他者であれば、彼女たちは「健気」であり、現代版「おしん」にとどまる。しかし彼らの領域が侵されるにつれ、まるで警報アラームを鳴らすかのように「ジャパゆきさん」を周縁化するイメージが付与され、「ジャパゆきさん」は未知なる恐怖と化す。

②　女性誌における「ジャパゆきさん」～未知の同性～

女性誌で「ジャパゆきさん」について言及する記事は男性誌に比べて少ない。そこでは「ジャパゆきさん」は主に観光ビザで来日し、スナックなどの性風俗産業に携わる外国人女性として取り上げられ、彼女たちに対して３つのイメージが付与されている。第一に、純粋・健気に生きる女性というイメージだ。たとえば家族のために来日し、苦境の中「真面目な」日本人男性と恋に落ち、正式に結婚、家族になるために入管に出頭しようと決意する不法就労の女性（微笑 1989年11月25日 pp. 55-58）や、減少する若い日本人女性のかわりに村を活気づける、明るく慎ましやか、家族思いのスナックで働く外国人女性（女性セブン 1988年３月13日 pp. 66-72）など、彼女たちの姿に女性としての生き方を見出そうとする。女性誌における純粋・健気さは男性誌におけるそれとは異なり、違う世界の女性としてではなく、家族や愛のために生きる同じ女性という共感を抱かせる。そして２つめのイメージは、悪い日本人男性にだまされた女性である。たとえば、恋人の日本人男性たちに裏切られ、子どもを抱えながら路頭に迷う女性（女性自身 1994年３月８日 pp. 252-253）、日本人男性との結婚を餌にスナックで働かされる女性（婦人公論 1985年４月 pp. 334-341）が挙げられる。このように日本人男性の無責任さの犠牲者として「ジャパゆきさん」が描かれ、日本人男性に対する非難のアイコンとなっている。さらに、犠牲者性が増幅されたイメージとして、日本人、特に「ヤクザ」等の組織によって搾取・虐待された保護対象として描かれている。たとえば、借金返済のための売春強要と長時間労働で身も心もボロボロにされた「ジャパゆきさん」（コスモポリタン1988年２月 p. 195、同年４月 p. 199、1992年12月 pp. 136-137）、賃金不払いや監禁、暴行など人権侵害を受けても公に訴えられないアジアの出稼ぎ女性（クロワッサン 1990年11月 p. 5）が挙げられる。このようなイメージは外国人女性を支援するNGOや民間シェルターへのインタビュー記事の際によく用いられ、そこでは日本人男性だけではなく日本人女性のもつ差別意識も批判する。さらに細分化して考察すると、未婚女性を中心読者とする雑誌では、「再会を意味する入れ墨まで顔に彫り」（微笑 同上 p. 57）恋人を待つ女性、日本人男性に結婚や売春を持ちかけられることに腹を立てる女性（女性セブン同上 pp. 71-72）など、貞淑な女性像を強調し、また売春に関わったことがあってもそれは強制の結果として回収される。一方、既婚女性を中心読者層にする雑誌では騙された、人権侵害を受けた女性として取り上げられているものの、記事数は２件と極めて少ない。また、そこでは前者ほど性風俗産業に位置する「ジャパゆきさん」の滞日状況は詳細に語られない代わりに、日本人男性に蹂躙された「自国の社会からもはじきだされた貧しいアジアの女」（婦人公論 同上 p. 341）として同情を抱かせる。

このように女性誌は男性誌と異なり、観光ビザで性風俗産業に従事するという違法性を女性の責任とせずに「ジャパゆきさん」の別個の解釈を提示し、「ジャパゆきさん」という存在にセンシティブであると同時に、自己内省しながら同じ女性の問題にひきつけようとする。しかし、「同じ女性」というのは、家父長制における「伝統的な女性」像の枠内での解釈にすぎない。そしてそこから外れる女性に対しては「…犠牲者なんだって思わなくちゃいけないよ。男にだまされて、もてあそばれている可哀想な女…」（コスモポリタン 同上 p. 199）ととらえ、日本人男性に対する批判材料とすると同時に、日本人女性と「ジャパゆきさん」との間に序列と分断を生み出してしまう。それは、既婚女性にとっての「家族崩壊を招く敵」、未婚女性にとっての「売春で稼ぐ逸脱した女性」であった「ジャパゆきさん」への非難を憐れみの対象へと転換しただけで、「ジャパゆきさん」と日本人女性は決して交わることはない。女性誌において「ジャパゆきさん」を語ることは、家父長制の枠組みの中で自己のポジションを確認し、維持することであり、そこで読者にむけられる「ジャパゆきさん」は日本人女性が手を差しのべるべき存在として意味づけられている。

③　経済誌、労働問題誌における「ジャパゆきさん」～単純労働者受け入れの理由として、出稼ぎ女性の周縁として～

まず、会社の中間管理職や「ビジネス・エリート」を対象とする経済誌において特徴的なのは、「不法就労の現場から汗と汚れの中でジャパゆき労働者が語った…」（週刊東洋経済 1988年３月12日 pp. 15-17）など、外国人労働者問題の中で観光・留学を装った出稼ぎ労働者として語られている点である。悪質ブローカーに騙され、いわゆる３Ｋ職場で働く外国人であり、そこに男女の区別はない。滞日外国人を支援するNGO等のインタビューを通じて管理売春等苦境に陥った奴隷のような出稼ぎ女性として「ジャパゆきさん」が語られることはあるが、あくまで外国人（男性）労働者と組み合わせる形であり（財界展望 1995年11月「ジャパゆきさん“お助け”最前線『外国人労働者はいらない』の被害者たち」pp. 146-151)、男性出稼ぎ労働者問題の一部にすぎない。そして、彼らがうける差別や苦難の原因は日本経済・社会の閉鎖性や差別意識にあるとして、日本の保守的側面を批判し、「外国人労働者の人権尊重」を主張すると同時に「第二の開国」の是非という外国人非熟練労働者の受け入れに問題をすりかえる（技術と人間 1989年10月 pp. 84-85)。このように、経済誌では「ジャパゆきさん」に性別は関係なく、それはだた安価な労働力を提供する外国人労働者でしかない。そして彼らの人権侵害批判は、より安価な労働力をより大量に確保するために単純労働者に市場を開放しようとする理由づけに過ぎない。経済誌においては「ジャパゆきさん」は経済効率の上にある存在でしかない。

それに対して、労働問題誌では日本経済、社会に対峙した存在である外国人労働者の中に出稼ぎアジア女性を位置づけながら、「出稼ぎ女性は必ず強姦や買売春の強要があり、男性よりも多く搾取され」るため（新地平 1987年９月 p. 38)、出稼ぎ男性とは区別して女性特有の問題として捉えなおす。その中で「ジャパゆきさん」は「買春目的に輸入される女たち」であり（新地平 1985年７月 p. 101)、「“女である”ことがまさに商品価値であるのが、いわゆるジャパゆきさんや、水商売で働くシンガーとかダンサーの名目の女性」（新地平 1986年９月 p. 67）というように、「ジャパゆきさん」は興行ビザで来日したエンターティナーとは別に扱われる。そこでは出稼ぎという要素よりも、「強制売春」などの女性性の蹂躙に焦点が置かれ、「ジャパゆきさん」は出稼ぎ女性の周縁に位置づけられている。性風俗産業に自発的に従事するのではなく、それによって女性たちが収奪されているのであり、そこに「労働者」としての女性像は存在しない。「ジャパゆきさん」を出稼ぎ女性の中でより深刻な問題として説明することには、出稼ぎ女性の脆弱性を強調することだけでなく、女性性の商品化に対する批判がこめられている。このように労働問題誌では、グローバルな規模での女性の出稼ぎと性風俗産業の関係性の中で、「ジャパゆきさん」は女性特有の人権侵害の典型とされている。

以上により、経済誌、労働問題誌ともに「ジャパゆきさん」を人権を蹂躙された出稼ぎ外国人(女性)の象徴と取り上げるものの、その意味づけは異なる。前者では「ジャパゆきさん」は単なる労働力として男性外国人労働者に回収され、日本における非熟練外国人労働力の自由化を後押しする要因とされる。後者では出稼ぎ女性が直面する苦難を女性特有の問題として捉えなおすために、「ジャパゆきさん」は出稼ぎ女性の脆弱性を示す典型例とされる。そこでは、「ジャパゆきさん」は「労働者」とは言い難い、全人格を商品として売買される存在と意味づけられる。

④　治安関係誌における「ジャパゆきさん」～「悪」の末端～

国家の安全・治安に関する記事では「ジャパゆきさん」はどのように扱われているのだろうか。そこでは風俗関係事犯としての「わが国に観光目的に入国した外国人女性のうち、風俗営業等に稼動する資格外活動や不法残留等の違法な滞在状態で、売春等の風俗関係事犯に係わった者」（警察時報 1987年５月 p. 22）であり、「治安の基礎をなす我が国の風俗環境」に影響を及すとし（同上)、暴力団関係者や悪質ブローカー・風俗営業等の経営者の存在を指摘しながらも、主に売春防止法や風営法、入管法で検挙された外国人女性の国籍、年齢と稼動形態について「実態」を紹介する。「健全な風俗環境」を維持するために、「ジャパゆきさん」は日本社会に侵入した倫理的治安を脅かす存在として取り締まりの対象とされる。さらに「ジャパゆきさん」が日本社会に存在するということは、彼女の背後に日本社会全体の治安を脅かす「悪」が国内にはびこっているということも意味する。したがって、「ジャパゆきさん」はその「悪」を芋づる式に取り締まるためのツールでもある。このように、治安関係誌において「ジャパゆきさん」は日本の倫理的治安を脅かす、「悪」に連なる末端と意味づけられる。

⑶ 「ジャパゆきさん」という蔑称

以上の検討から、「ジャパゆきさん」について日本に出稼ぎにきた外国人女性という要素は共通項として確認できたが、そのイメージや意味づけは各視点が何を求めるのかによって様々に語られる。男性誌において、「ジャパゆきさん」には日本人男性の男性性を肯定する性化されたイメージと、「伝統的」でない日本人女性を戒めるジェンダー化されたイメージが共存する。それに加えて、「ジャパゆきさん」は男性性、さらには彼らの命までも危険にさらすとして、排除・監視すべき存在としても意味づけされた。治安関係誌は「ジャパゆきさん」を倫理的治安を脅かす「悪」の末端と意味づけることで男性誌によるイメージを下支えした。しかし、それに拍車をかけたのは女性誌や労働問題誌による意味づけだったのではないか。女性誌は結局のところ家父長制の枠内でしか滞日出稼ぎ外国人女性をみようせず、そこで説明できない女性は日本人男性や犯罪組織の犠牲者として捉え直す。また労働問題誌では性愛の商品化は女性に対する収奪であるという前提があり、「ジャパゆきさん」は出稼ぎ女性の中で周縁に位置する脆弱な女性と意味づけられた。両者の意味づけは、「ジャパゆきさん」を同じ「女性」や「労働者」から切り離し、孤立させてしまった。さらに、経済誌も「ジャパゆきさん」が周縁化された存在であるほうが経済合理性に好都合であるため「ジャパゆきさん」の犠牲者化に迎合していった。このような複数の雑誌メディアが滞日出稼ぎ外国人女性を「ジャパゆきさん」と名指したことによって、「外国人労働者」として直視せずにあたかもそれとは異なる存在として構築し、彼女らの移動の意味や日本社会での存在を矮小化し、貶めてしまった。それは伊藤が指摘するように、女性による移動や労働の固有の意味を問うことやグローバリゼーションのもとでの日本における「外国人労働者」の顕在化を遅らせてしまうことにつながったといえよう。

4．結び

本稿では雑誌記事から様々に構築された「ジャパゆきさん」をめぐるイメージを抽出し、その意味付けを考察した。長谷川のいう「ジャパゆきさん」の蔑称イメージは雑誌のカテゴリーを問わず共通性として確認できるが、「ジャパゆきさん」に付与されたイメージは決して一つではない。そして、「ジャパゆきさん」が一定のイメージで語られることが問題なのではなく、むしろそのように語ることで滞日出稼ぎ外国人女性の存在を日本社会がどのようにあつかうことになるのかに注目せねばならない。男性誌、治安関係誌で「ジャパゆきさん」は性化され、ジェンダー化された存在であるとともに監視・排除対象にもされる。さらにそのようなイメージに対抗しうるようにみえた女性誌、労働問題誌、経済誌は、彼女らの脆弱性という側面から同情すべき保護対象としてしか「ジャパゆきさん」を再定義せず、再び「ジャパゆきさん」という呼び名で彼女らを囲い込むことにかわりはなかった。このように「ジャパゆきさん」と名指されることで、滞日出稼ぎ外国人女性はどの視点からも切り離され、孤立させられてしまったのである。

それでは、なぜ滞日外国人女性を肯定的に描くような「ジャパゆきさん」像が新たにあらわれなかったのか。それは、「ジャパゆきさん」にイメージを付与する際に、名指す側の「利害・価値・関心」が絡んでくるからだ。呼び名の生成と使用は、それを行う側にとって社会的政治的文化的ポジションを維持、強化するためのツールである。また「ジャパゆきさん」と名づけられる側はその過程に一切関与しない一方的な行為である。「ジャパゆきさん」は、名指す側が滞日出稼ぎ外国人女性をどのように認識したいのかを映し出す。したがって「ジャパゆきさん」と呼ばれる滞日出稼ぎ外国人女性は日本社会にとって鏡像的他者なのである。

それでは、「ジャパゆきさん」はどのような日本社会の有り様を映し出すのか。あらゆる記事の中で、入管職員、警察関係者、性風俗店舗の経営者、風俗ライター、地元情報通、タクシー運転手、近隣の住民、外国人支援をするシェルター職員、取材記者の言葉によって「ジャパゆきさん」の「現実」が語られるが、それは一体誰の「現実」なのか。滞日出稼ぎ外国人女性が「ジャパゆきさん」と名指されるとき、彼女たちにとって日本社会は共に生活を営む「定住する場」ではなく、稼ぐために「一時的に留まる場」であり、彼女たちは日本社会の一員に決してならないという排除意識が前提として暗示される。そして経済格差から生じる出稼ぎが、「貧しき国」から「富める国」へと向かうという構造を反映して、出稼ぎ女性と受け入れ側の日本社会の間に序列を生み出す。さらに、男性誌や女性誌の記事は、日本社会ではジェンダーとセクシュアリティに対して極めて強固な家父長的秩序が働いていることを顕著に示した。このような「ジャパゆきさん」に対するまなざしの中に、「出稼ぎ」「外国人」「女

性」に対する日本社会のジェンダーの有り様や排他性が示されているのである。

本稿では「ジャパゆきさん」という呼び名とそれを名指す側やその延長線上にある日本社会との連関性を示したが、このような考察はさらに日本における人身売買（人身取引）をめぐる議論の再考にも繋がるだろう。日本において、人身売買は被害者と加害者という二項対立的な視点から議論されがちである。しかし、2000年前後からフェミニストによって展開されるtrafficking をめぐる議論は人身売買という事象と日本社会の相関関係を考察する必要性を示唆する。Doezemaは欧米における現代のtrafficking に対する運動は表面上女性の保護を唱えるが、根本的関心は国家による女性の管理であるとする。そして、その背後には移動による女性のautonomy、家族崩壊、ナショナルアイデンティティの喪失に対する移動の送り出し側の不安と、受け入れ側の人種的・文化的「他者」に対する恐れが併存していると指摘する（Doezema 2000, pp. 42-47）[18]。また、Parreñasはtrafficking が女性の倫理的価値の問題へと収斂されており、米国主導のグローバルなtrafficking 廃絶の動きには、女性の保護という名目で女性の倫理的価値の管理を行う寛容な父権制 benevolent paternalism が横たわり、それが絶えず女性の移動に働きかけてきたという（Parreñas 2008, pp. 135-137）[19]。両者はtrafficking が虚構の産物であると主張するわけではなく、その被害当事者の存在を無視するわけでもない。Trafficking という事象を通じて出稼ぎ女性が国家によって管理されており、そこに彼女たちに対する社会のまなざしや体制が絡んでいることを示唆する。日本において「ジャパゆきさん」と呼ばれた出稼ぎ外国人女性が直面する困難は、「人身売買の被害者」とされる女性らのそれと重なり合う部分がある。「ジャパゆきさん」同様、「人身売買の被害者」も滞日出稼ぎ外国人女性に対する呼び名のひとつとしてみるならば、前者では見過ごされがちであった出稼ぎ外国人女性に対する搾取と暴力が、後者では犯罪被害という枠組みによってより可視化されたと考えられる。その一方で「人身売買の被害者」と出稼ぎ外国人女性を名指す行為には、「ジャパゆきさん」同様、彼女たちを日本社会がどのように認識したいのか、名指す側のまなざしが不問に付されてはならない。本稿の考察は、人身売買とその被害者が日本社会でどのように受容されたかの考察に繋がる作業と考える。

一方で本研究の限界として、主に「ジャパゆきさん」に焦点をしぼったため、滞日出稼ぎ外国人女性に関わる事象を総体として取り上げられなかった。たとえば、1990年代のタイ人女性に集中して見られる怪死・殺人事件や性風俗産業に従事する欧米白人女性やラテン系女性の言説が挙げられる。前者は「人身売買の被害者」をめぐる言説に密接に関連する。また後者では、欧米白人女性は経済力を持つ先進国出身とされるため、自らの意思で性風俗産業に従事するという性的主体性に閉じ込められ、いまだ不可視化されたままである。一方ラテン系女性は「ジャパゆきさん」と類似した政治経済状況に置かれながらも、西欧的身体をもつ存在として異なる表現と意味づけがなされている。これらの言説は、「ジャパゆきさん」や「人身売買の被害者」をめぐる言説と相互に連関するものであると考える。今後これらの課題に取り組み、滞日出稼ぎ外国人女性をめぐる言説の構造的連関性を考察し、人身売買とその被害者をめぐる議論を日本の文脈に即して再考していきたい。

註

1　山谷哲夫 1985年『じゃぱゆきさん』情報センター出版局　本文中（pp. 27-28、p. 285）に山谷自身が作り出した言葉であると解釈できる記述はあるが、その真偽は定かでない。

2　「人権擁護局のアンケート『じゃぱゆきさん』やめて“差別”と市民団体批判」（1992年１月27日付京都新聞）

3　井上輝子、上野千鶴子、江原由美子、大沢真理、加納実紀代編 2002年『岩波女性学事典』岩波書店、長谷川美佳が当用語を執筆。

4　鈴木伸枝 1998年「首都圏在住のフィリピン人既婚女性に関する一考察」『ジェンダー研究』第１号 pp. 97-112

5　伊藤るり 1992年「『ジャパゆきさん』現象再考　八〇年代日本へのアジア女性流入」伊豫谷登士翁・梶田孝道編『外国人労働者論　現状から理論へ』弘文堂 pp. 293-332

6　久田恵 1989年『フィリッピーナを愛した男たち』文藝春秋

7　笠間千浪 2002年「ジェンダーからみた移民マイノリティの現在－ニューカマー外国人女性のカテゴリー化と象徴的支配」宮島喬・梶田孝道編『国際社会④マイノリティと社会構造』東京大学出版会　pp. 121-148

8　Mackie, V. 1998 “Japayuki Cinderella Girl: Containing the Immigrant Other” *Japanese Studies*, Vol. 18, No. 1, pp. 45-63

9　Hall, S. 1978 “The Social Production of News” In S. Hall et al., *Policing the Crisis* Macmillan pp. 53-77

10　上野千鶴子 1990年『家父長制と資本制 マルクス主義フェミニズムの地平』岩波書店 マギー・ハム　木本喜美子、高橋準訳 1999年

『フェミニズム理論辞典』明石書店

11　諸橋泰樹 1993年『雑誌文化の中の女性学』明石書店

12　解釈するうえで、このような分類自体、既に政治性を帯びていることに常に注意しなくてはならない。

13　言説とは何らかの仕方でまとまって、出来事の特定のヴァージョンを生み出す一群の意味、メタファー、表象、イメージ、ストーリー、陳述等をさし、あらゆる対象をめぐって異なる多様な言説がそれぞれ特定の像を構築する。そして、言説分析は、繰り返し語られるテーマを探り、特定の像を描く統一的な一群の陳述・フレーズ・語のリストをそのテーマごとに作成することである。(ヴィヴィアン・バー田中一彦訳 1997年『社会的構築主義への招待―言説分析とは何か』川島書店 pp. 257-265)

14　メディア・リサーチ・センター 1985-1995年 『雑誌・新聞総かたろぐ』 メディア・リサーチ・センター

15　川井良介 1997年「雑誌の刊行形態」『山梨英和短期大学紀要』vol. 131 山梨英和大学 pp. 90-110

16　阿部亮吾 2005年「フィリピン人女性エンターティナーのパフォーマンスをめぐるポリティクスーミクロ・スケールの地理に着目してー」『地理学評論』78巻14号 pp. 951-975

17　エイズ（AIDS）とは後天性免疫不全症候群であり、HIV感染が即ちエイズではない。本稿で取り上げた記事には両者の混同が見られるため、本文では「エイズ」と記す。

18　Doezema, Jo. 2000 “Loose Women or Lost Women?　The Re-emergence of the Myth of ‘White Slavery’ in Contemporary Discourses of ‘Trafficking in Women’” *Gender Issues* Vol. 18, No. 1, Winter pp. 23-50

19　Parreñas, Rhacel Salazar.　2008 “The U.S. War on Trafficking and the Moral Discipling of Migrant Women” In *The Force of Domesticity: Filipina Migrants and Globalization*.　New York University Press pp. 134-168